

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26284003

研究課題名（和文）翻訳の視点から探る日本哲学 日本と東アジア・日本と西洋における言語と思想の相関性

研究課題名（英文）Japanese Philosophy Investigated from the Viewpoint of Translation - The Interrelationship of Language and Thought between Japan and East Asia, Japan and the West

研究代表者

上原 麻有子（UEHARA, Mayuko）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：40465373

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「翻訳」の諸問題を哲学的に検討することを目的とし、特に日本哲学における具体的な言葉と翻訳の問題を掘り下げた。この場合の「翻訳」とは、あるテキストを外国語に翻訳するという意味に限るものではなく、哲学する過程ですでにそこには翻訳・再解釈がかかわっているという意味にも用いている。欧米、台湾、日本の研究者が集まり、京都学派の哲学やマルクス哲学、仏教経典の概念・用語について、複数文化を越境する視点から哲学史上の様々な問題と関連させつつ、考察することができた。また井筒俊彦の意識の理論、中井正一の映画理論、現代の歌人の創造の体験に基づき、「言語と非言語」、「表現」の問題を検討するに至った。

研究成果の概要（英文）："This project aimed at thinking philosophically about different questions of translation", delving into the concrete problems of language and translation in Japanese philosophy. "Translation" in this case does not mean only "rendering a text from a certain language into another language", but it is also used to mean that "translation-reinterpretation entails a philosophizing process". Scholars from Western countries, Taiwan, and Japan collaborated to investigate the concepts-terms of the philosophies of the Kyoto school, Marx, and sutras of Buddhism by connecting them to diverse problems taking place in the history of philosophy from a transcultural viewpoint. In addition, the questions of "language and non-language" and "expression" were examined in Izutsu Toshihiko's theory of consciousness, Nakai Masakazu's film theory, and the contemporary "Japanese tanka" poet's experience of creation.

研究分野：近代日本哲学、翻訳学

キーワード：日本哲学 翻訳学 京都学派 比較哲学 言語哲学

### 1. 研究開始当初の背景

西洋の哲学者が翻訳を哲学的に深く洞察した例は、ベンヤミン、ハイデガー、リクール、セール、スタイナー等の研究が示す通り、歴史的に多数見られる。しかし日本では事情は異なり、哲学者には、翻訳を哲学的思索の対象にするという発想がない。つまり「翻訳＝言語と思想の連関」の問題に哲学的根拠を見ようとしていないのである。本研究は、上記の哲学者などの考えを学び、「翻訳は哲学的反省を伴う行為」であるとの立場に立ち、哲学を翻訳の視点から考察することで、それを支える言語や論理の様々な問題を浮き彫りにすることが可能であると考えた。また、多文化間の比較哲学という視点を加えることによって、問題をさらに豊かに扱うことができる。このようにして、具体的な課題に焦点を当ててみたいという企図から、本研究は立案された。

### 2. 研究の目的

「翻訳」を学問の対象であり方法と捉え、その視点から、東アジアと西洋の哲学思想を摂取しそれを基盤に作られ発展してきた日本哲学における、言語と思想の相関性を探究する。特に、二組の比較文化圏「東アジアと日本」と/あるいは「西洋と日本」での言語と思想の相互の関わりが、どのように日本哲学の形成に創造的な影響を与え、その発展に結実したのかを明らかにしたい。具体的には、(1)翻訳により生まれた日本哲学の言語、(2)西洋語・東アジア語に翻訳された日本哲学と日本哲学研究、(3)日本語で考える・哲学する、という三つの課題を設定し、各課題の中でさらに解釈、論理、用語、表現、象徴など翻訳と関連する問題に取り組む。上記(1)・(2)・(3)は、以下のような内容を検討することになる。

(1)用語研究：主要哲学用語を取り上げ、各用語に、東洋・西洋の思想がどのように織り込まれているのか、その背景を調査する。

(2)日本哲学の翻訳研究：外国語に翻訳された日本哲学が、どのように解釈されているのか、またそこには、どのような言語表現上の制約/自由があるのかなどについて検討する。

(3)言語と思想の相関性：日本語で考える・哲学するということの意義を検討するために、他言語で考える・哲学することと比較する。さらに、詩歌のような情的表現に優れていると言われる日本語における、哲学言語の側面と詩的言語の側面との関わりについて考察する。

### 3. 研究の方法

翻訳の視点から日本哲学における言語と思想の相関性を検討する本研究は、(1)翻訳により生まれた日本哲学の言語、(2)西洋語・東アジア語に翻訳された日本哲学と日本

哲学研究、(3)日本語で考える・哲学する、という三つの課題を軸に展開される。この三区に分けて、日本哲学を専門とする研究代表者・分担者・協力者が、各自、得意とする個別の専門分野(仏教、禅哲学、儒学、宗教哲学、ドイツ哲学、フランス哲学、中世哲学、解釈学など)を担当する。また、国内・海外の研究協力者の力を借りて、国内での研究会、国際ワークショップ・シンポジウム(フランス、台湾、日本)を開催し、討議・対話の機会を定期的に設ける方法をとる。

### 4. 研究成果 (敬称略)

#### (1)用語研究

定例研究会での発表：西田幾多郎のテキストを素材に、用語・概念の解釈についての分析研究が行われた。

・分担者、嶺秀樹「西田とショーペンハウアー - 美のアイデアをめぐる」。

・日本哲学分野の博士課程の大学院生・OD 中嶋優太、太田裕信、八坂哲弘、Simon Ebersolt が、西田幾多郎「場所」とその英訳を対照しながら、本論文の主要用語について検討した。

ワークショップ「翻訳と日本哲学」(ライプツィヒ大学)での発表：マルクスの主要用語の日・仏・独での翻訳をめぐる、その概念の本質的な問題を探る研究が行われた。分担者、平子友長「マルクスにおける物象化と物化」。

定例公開講演会「日本哲学史フォーラム」(京都大学)での研究グループ外の研究者による講演：仏典漢訳の諸問題について、主要用語に焦点を当てながら論じたもので、日本哲学研究に対しても大変啓発的な内容であった。船山徹「漢訳仏典の音写語と翻訳不可能性」、宮崎泉「仏教における智慧 その翻訳と仏教理解をめぐる」。

#### (2)日本哲学の翻訳研究

ワークショップ「翻訳と日本哲学」(ライプツィヒ大学)での発表：翻訳の観点が必要にかかわってくるものとして、「日本語と倫理学」、「密教」、「多文化」の問題が考察された。分担者、清水正之「「関係の倫理学」と翻訳 人と人との間と日常言語」。研究協力者、平田俊博「空海と日本語 密教における漢訳仏典の日本語への翻訳」。分担者、加藤泰史「Kulturelle Diversität und kulturelle Übersetzungen」。

国際学会「Cross-Cultural Phenomena in the Modern Exchange between East Asian and Western Thought」(中央研究院院・中国文哲研究所、台湾)での発表：「表現」をテーマとするパネル発表。代表、上原麻有子「田辺元における象徴詩 無即有、有即無という表現」。分担者、藤田正勝「形なきものの形を見、声なきものの声を聞く」。分担者、田中久文「「あはれ」という美意識にみられる表現の問題」。

定例公開講演会「日本哲学史フォーラム」(京都大学)での研究グループ外の研究者による講演：「表現する自己、表現する世界」をテーマに、広義の「翻訳」について、歌人・フィルムスタディーズ・中国文学の研究者が、日本哲学研究者と対話を行った。木津祐子「表現する唐通事 17～19世紀長崎を舞台に」。水原紫苑(歌人)「短歌の表現と方法」。Mitsuyo Wada-Marciano「哲学と映画・メディア研究のクロスオーバー」。

### (3) 言語と思想の相関性

定例研究会での発表：西田・西谷のテキストを素材に、言語と思想の関係、言語と非言語の関係の問題が検討された。杉本耕一「西田哲学における「哲学」と「哲学」以前「宗教」あるいは「宗教」以前を含めて」。岡田勝明「物が心に映る処 西谷啓治の共通感覚論」。

ワークショップ「翻訳と日本哲学」(ライプツィヒ大学)での発表：思想・経験と言語化の問題を、両者の一種の翻訳として捉えることもできる。この意味における考察(西田・ヘーゲル・フンボルト等の思想、あるいは老子・荘子・龍樹・エックハルトの言語観を参照)がなされた。嶺秀樹「経験と言葉直接性をめぐって」。藤田正勝「言葉と沈黙」。

以上のような成果から一部を選び、本研究の総合的なまとめとしての論文集(日本語)を出版する計画を進めている。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計16件)

上原麻有子、伊藤邦武、出口康夫(以下省略)、「西田哲学と一人称の哲学化」『哲学研究』第600号、京都哲学会、2016年12月、18-38頁。

岡田勝明、J.W.ハイジック、小林信之、寺尾寿芳(以下省略)、「悲哀の身体 西田幾多郎における知と愛」『西田哲学年報』第13号、西田哲学会、2016年、1-27頁。

清水正之、須田朗、村岡晋一(以下省略)、「文献学・解釈学・現象学 哲学と思想史研究の間」『紀要 哲学』、中央大学文学部、第58号、2016年、51-67頁。(査読有)

美濃部仁、杉田孝夫、大橋容一郎(以下省略)、「実在性の拠り所としての良心と良心を超える立場 1800年前後のフィヒテ」『理想』第697号、2016年、55-67頁。

上原麻有子、藤田正勝、西平直(以下省

略)、「西田哲学の再解釈 行為的直観としての顔の表情」『思想』第1099号、2015年、岩波書店、88-104頁。

竹花洋佑、小林敏明、氣多雅子、河野哲也(以下省略)、「種の自己否定性と『切断』の概念」『日本哲学史研究』第12号、京都大学大学院文学研究科日本哲学史研究室紀要、2015年、82-107頁。

嶺秀樹、米虫正巳、鶴殿慧、久保田浩平(以下省略)、「行為的直観とムーゼの時空構造 西田の無の自覚的限定の立場から」『哲学研究年報』第48号、関西学院大学、2015年、1-20頁。

上原麻有子、オギュスタン・ベルク、山田弘明、小浜善信(以下省略)、「ランボーと西田 感覚の触れ合うところ」『日本の哲学-特集フランス哲学と日本の哲学』第15号、昭和堂、2014年、3-15頁。

杉本耕一、本多弘之、藤原智(以下省略)、「清沢満之の「宗教」および「宗教哲学」における「哲学」の意味」『現代と親鸞』(親鸞仏教センター)第31号、2015年、152-199頁。

上原麻有子、オギュスタン・ベルク、山田弘明、小浜善信(以下省略)、「田辺元の象徴と哲学 ヴァレリーの詩学を超えて」『日本の哲学-特集フランス哲学と日本の哲学』第15号、昭和堂、2014年、81-96頁。

太田裕信、藤田正勝、福谷茂、氣多雅子(以下省略)、「二つの行為の哲学 西田・田辺論争をめぐって」『日本哲学史研究』第11号、京都大学大学院日本哲学史研究室紀要、197-219頁、2014年。

加藤泰史、平山敬二、小川正人(以下省略)、「現代ドイツの自然美学」『ヘーゲル哲学研究』第20号、2014年、83-96頁。

田中久文、川本隆史、苅部直(以下省略)、「丸山眞男の天皇論に関する「自己内対話」和辻哲郎との比較において」『現代思想』8、青土社、2014年、87-97頁。

美濃部仁、Brief aus Japan, Briefe über Philosophie weltweit, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Band 62; Heft, 2014, pp. 544-551.

嶺秀樹、秋富克哉、中岡成文(以下省略)、「西田の場所の思想における叡智的なるもの」『西田哲学会年報』第11号、西田哲学会、2014年、1-21頁。(査読有)

嶺秀樹、小林信之、森岡正博(以下省略)、「存在の悲哀と無の慈しみ 自覚的経験から見た根本気分」『電子ジャーナル Heidegger-Forum』Vol.8、ハイデガー・フォーラム、2014年、70-85頁。(査読有)

〔学会発表〕(計9件)

上原麻有子、【招待講演】「日本哲学における女性哲学の可能性」, International Conference on Japanese Philosophy, “Opening up Japanese Philosophy: The Kyoto School and After”, Kyushu University Nishijin Plaza, 7-9 October 2016, Fukuoka.

平子友長、【講演】「後期マルクスの経済学批判構想を理解するための基礎カテゴリー」マルクス研究会定例研究会、駒澤大学本部棟6階会議室、2016年2月27日、東京。

上原麻有子、【招待講演】“Translatability of Philosophy—Significance of the First Person in Nishida Kitaro”, “The nature of Translation and Interpretation Revealed in the Context of Modernity: the Dialogue between the Chinese and Japanese Philosophers”, Fudan University, May 22-23, 2015, Shanghai.

嶺秀樹、【講演】“Philosophie Nishidas und Phänomenologie Husserls”, Freiburg 大学、2015年6月、Freiburg.

竹花洋佑、「種の自己否定性 「切断」の概念の理解に向けて」第3回田辺哲学シンポジウム口頭発表、福岡大学、2015年8月28日、福岡。

岡田勝明、【講演】“Der Begriff von Bild in der WL und die Realitaet in der Buddhistischen Leere”, 国際フィヒテ学会、マドリッド大学、2015年9月8日、マドリッド。

美濃部仁、“Das Ich und das Individuum. Ueber die Rolle der Individualitaet im Wissen bei Fichte”, IX. Kongress der Internationalen J. G. Fichte-Gesellschaft, マドリッド大学、9. 9. 2015, マドリッド。

藤田正勝、【招へい講演】「表現と身体 「表現的存在」としての人間」第30回日本哲学史フォーラム、京都大学、2015年12月12日、京都。

上原麻有子、【招待講演】“The philosophy of Nishi Amane Toward the creation of new knowledge through translational inquiry”, World Consortium: Transformation of Confucianism And Construction of A New World Cultural

Order, University of Hawai'i, , October 8-12, 2014, Hawai'i.

〔図書〕(計14件)

上原麻有子，“The Philosophy of Nishi Amane-Toward the Creation of New Knowledge through Translational Inquiry”, Globalizing *Japanese Philosophy as an Academic Discipline*, CHEUNG Ching-yuen and LAM Kevin (Eds.), National Taiwan University Press / V&R Unipress, 2017, 131-147.

竹花洋佑，“Tanabe’s Theory of “World Schema” and Miki’s “Logic of the Imagination””, Globalizing *Japanese Philosophy as an Academic Discipline*, CHEUNG Ching-yuen and LAM Kevin (Eds.), National Taiwan University Press / V&R Unipress, 2017, 211-239.

藤田正勝、『九鬼周造 理知と情熱のはざまに立つ ことばの哲学』、講談社、2016年、1-237頁。

上原麻有子、藤田正勝、李光来、全19名(9番目)、「西周の哲学 翻訳的探究を経て新たな知の創造へ」『思想間の対話 東アジアにおける哲学の受容と展開』藤田正勝編、法政大学出版局、2015年、153-172頁。

加藤泰史、藤田正勝、李光来、全19名(12番目)、「和辻風土論とトランスカルチュラルリズムの問題 「越境する身体」としての「旅行者」」『思想間の対話 東アジアにおける哲学の受容と展開』藤田正勝編、法政大学出版局、2015年、214-239頁。

加藤泰史、「クヴァンテの「プラグマティズムの人間学」構想と生命医療倫理学の現在」ミヒヤエル・クヴァンテ『人間の尊厳と人格の自律』加藤泰史監訳図書への所収論文、法政大学出版局、2015年、289-318頁。

田中久文、『日本の哲学をよむ 「無」の思想の系譜』、筑摩書房、2015年、1-327頁。

藤田正勝、李光来、全19名(1番目)、「思想間の「対話」とは何か」『思想間の対話 東アジアにおける哲学の受容と展開』藤田正勝編、法政大学出版局、2015年、7-20頁。

藤田正勝、Seiichi Yamaguchi, Keiji Sayama, Yutaka Zakota, 全13名(13番目)、「Rezeption und Entwicklung der Philosophie in Japan und Hegels Philosophie“, *Hegel in Japan*, Yoichi

Kubo und S. Yamaguch (Hrsg.), Münster:  
Lit Verlag, 2015, S. 223-232.

美濃部仁、藤田正勝、李光来、全 19 名  
(18 番目)「西田における知と絶対無」『思想  
間の対話 東アジアにおける哲学の受容  
と展開』藤田正勝編、法政大学出版局、2015  
年、342-355 頁。

藤田正勝、『清沢満之の歩んだ道 その  
学問と信仰』法蔵館、2015 年、1-201 頁。

岡田勝明, Rolf Elberfeld, Ralf Müller,  
Bret W. Davis, 全 20 名 (3 番目), „Die Logik  
des Ausdrucks bei Nishida, “ *Kitarō  
Nishida in der Philosophie des 20.  
Jahrhunderts*, Rolf Elberfeld, Yoko Arisaka  
(Hg.), Freiburg:Verlag Karl Alber, 2014, S.  
4-59.

清水正之、『日本思想全史』筑摩書房、  
2014 年、1-430 頁。

美濃部仁, *Absolutes Nichts –  
Überlegungen zu einem Grundbegriff  
Nishidas unter besonderer  
Berücksichtigung der Überwindung des  
Nihilismus bei Nishitani*, R. Elberfeld, Y.  
Arisaka (Hg.), *Kitarō Nishida in der  
Philosophie des 20. Jahrhunderts*, Verlag  
Karl Alber, 2014, pp. 99-106.

〔その他〕

ホームページ等

京都大学文学研究科 日本哲学史専修ホ  
ームページ

[https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/japanese\\_](https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/japanese_philosophy/jp-top_page/)  
[philosophy/jp-top\\_page/](https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/japanese_philosophy/jp-top_page/)

[http://www.nihontetsugaku-philosophie-j](http://www.nihontetsugaku-philosophie-japonaise.jp/)  
[aponaise.jp/](http://www.nihontetsugaku-philosophie-japonaise.jp/)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

上原 麻有子 (UEHARA Mayuko)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40465373

### (2) 研究分担者

岡田 勝明 (OKADA Katsuaki)

姫路獨協大学・人間社会学群・教授

研究者番号：00203985

小浜 善信 (OBAMA Yoshinobu)

神戸市外国語大学・外国学研究所・名誉教  
授

研究者番号：10124869

長野 美香 (NAGANO Mika)

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：10272733

嶺 秀樹 (MINE Hideki)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：30181960

田中 久文 (TANAKA Kyubun)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：30197412

平子 友長 (TAIRAKO Tomonaga)

一橋大学・社会学研究科・名誉教授

研究者番号：50126364

美濃部 仁 (MINOBE Hitoshi)

明治大学・国際日本学部・専任教授

研究者番号：50328960

清水 正之 (SHIMIZU Masayuki)

聖学院大学・人文学部・教授

研究者番号：60162715

竹花 洋佑 (TAKAHANA Yosuke)

大谷大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：60549533

杉本 耕一 (SUGIMOTO Koichi)

姫路大学・法文学部・准教授

研究者番号：70709659 削除：平成 28 年 8  
月 26 日

藤田 正勝 (FUJITA Masakatsu)

京都大学・総合生存学館・名誉教授

研究者番号：90165390

加藤 泰史 (KATO Yasushi)

一橋大学・社会学研究科・教授

研究者番号：90183780

### (3) 連携研究者

斉藤 直子 (SAITO Naoko)

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：20334253

### (4) 研究協力者

平田 俊博 (HIRATA Toshihiro)

山形大学・地域教育文化学部・名誉教授

研究者番号：60113974